様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４３１９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０１３７

研究課題名（和文）１９世紀における「イタリア美術」概念の形成に関する研究

研究課題名（英文）Study on the formation of the concept of "Italian Art" in the 19th century

研究代表者
河上　眞理（Kawakami, Mari）

京都造形芸術大学・芸術学部・准教授

研究者番号：２０４１１３１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円、（間接経費）　　1,050,000円

研究成果の概要（和文）：「イタリア美術」という概念はイタリア半島初の統一国家イタリア王国の成立に伴い形成されたと仮定し、絵画を中心に、遺産としての過去の美術の扱いと、同時代の動向との関係を通して考察し、以下が明らかになった。第一に18世紀に遡るイタリア美術史編纂事業を通して、半島内で展開した美術の独自性と世界への発進力が改めて認識された、第二に美術品保護の充実が訴求され、公私の美術館制度が整備された、第三に「イタリア美術」というブランド力の国際的な場面における効果が認識され、謂わば、海外における「イタリア美術」像を再受容し、イタリア王国は美術外交という施策を展開した。

研究成果の概要（英文）：It is assumed that the concept of "Italian Art" has been formed in accordance with the establishment of the first unified country the Kingdom of Italy of the Italian peninsula in the ninetenth century. The study of the handling of the art of the past as a heritage through the relationship with the trends in the contemporary paintings, the following were revealed. First, through the "Italian Art" history compilation project dated from eighteenth century, the uniqueness of that art was developed in the peninsula and that influence in the world has been recognized again. Second, the art protection was appealed and the public and private museum system was developed. Third, the effect in the international scene of the brand of "Italian Art" is recognized, if say, the re-acceptance of in overseas "Italian Art" image, was developed to measure the Kingdom of Italy that ara diplomacy.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：イタリア美術　イタリア美術史　イタリア王国　１９世紀　歴史画　美術アカデミー　フランス１９世紀　イギリス１９世紀

１．研究開始当初の背景

「イタリア美術」は、自明なものであるかにみえるが、イタリアが統一国家となったのは１９世紀後半であり、それ以降に創られた概念のはずである。従って、イタリア美術史において、１９世紀における「イタリア美術」概念の形成過程は、常に顧みられるべき原点とでもいうべき事柄のはずであるが、我々はその情報をほとんど有していない。

近年、「美術」概念の再考、美術の枠組と社会的役割を意識した研究が世界的に活発であり、イタリアにおいても、イタリア王国の形成と美術との関係に着目した研究、美術アカデミーと国家の美術政策に関する研究などが進められている。しかし、そこで語られるのは当時における美術と国家施策との関係であり、「イタリア美術」という大きな枠での考察は欠如している。

筆者は、1876 年にイタリア人教師を招聘して東京に設立された日本初の官立美術学校である工部美術学校を扱った博士学位論文『工部美術学校研究』において、同校に対してイタリア王国が多大な外交努力を図っていたことを明らかにし、さらに平成 18 年度～20 年度科学研究費補助金（萌芽研究 18652020）『１９世紀におけるイタリア王国の「美術外交」に関する研究』により、イタリア王国が「イタリアは美術の国である」(工部美術学校に関するイタリア側史料にこのことばが頻出する）という国家像を誇示する政治的な意図、すなわち「美術外交」というべき施策をもって、美術政策を進めていたことを解明した（以上の全成果は、科学研究費補助金「平成 22 年度研究成果公開促進費 <学術図書> 225018」を得て、『工部美術学校の研究』<中央公論美術出版、2011 年 2 月> を公開した。

今日の我々にとって自明にみえる「イタリアは美術の国である」ということが、１９世紀においては国家が威信をかけてわざわざ発信しなければならないことだったことが示されたことが重要である。ここから、「イタリア美術」という豊かなイメージをもつ概念も、１９世紀の国家統一の文脈において形成されたものに他ならないと、筆者は考えた。

この概念形成は、遺産としての過去の美術の扱いと、同時代美術の動向の両面において進められたとみられる。イタリア王国政府下においては、美術館の国立化や関連制度の整備による美術品の保存が進められた。「イタリア美術」に関する展覧会の開催や出版等も進められ、その動きは同国内だけでなく、イギリスやフランスにも見られる。一方、イタリア半島史に関わる歴史画は、美術アカデミーと直結した美術振興会において流行し、国立美術館の収集対象となった。この両者の動きを通じて、「イタリア美術」という概念が一つの像を結んでいったものと考えるに到った。

２．研究の目的

イタリア１９世紀を扱う本研究は、それまでに統一国家がなかった地域に、この時点ではじめて統一国家が生まれたことを基点としているが、イタリア美術史研究はこの点を踏まえて再考されるべきであり、その原点を与えるものになるはずである。美術遺産の扱いと歴史画を中心とする同時代美術の動向を関連させてとらえるところに独自の視点がある。

「イタリア美術」概念が１９世紀に確立されたものであり、その際の政治的ゆがみ、地域格差、統一により新たに生まれたもの、見えにくくなったものなどを明らかにする必要があると筆者は考えた。こうした点は、近代だけでなく、イタリア美術全体に波及する意義をもつものだからである。また、近代日本美術史の一つの原点もイタリアとの関係にあり、そこへの再考をうながす成果ももたらすだろうと考えた。

本研究は、１９世紀になって誕生したと考えられる「イタリア美術」の概念の形成過程を、絵画を中心として、遺産としての過去の美術の扱いと、同時代美術の動向との関係を通して明らかにしようとするものである。具体的には、①イタリア国内、あるいはイギリス、フランスにおける過去の美術の再評価の過程を、美術館の整備、展覧会開催や出版物刊行から考察すること、②同時代美術の動向を、特に美術アカデミーにおける歴史画への再注目の度合いにより解明すること。両者をイタリア王国の政策との関連により分析し、「イタリア美術」概念の枠組みを描出することを目的とした。

３．研究の方法

1861 年のイタリア王国統一から概ね 1940 年代に至るまでの、イタリア王国による美術政策につき、(1) 美術遺産の扱いの諸相、(2) 同時代美術における歴史画の諸相、(3)イタリア王国政府の美術政策につき、美術館において該当作品の実見をするとともに、文書館及び図書館における関係文書及び図書の博捜により研究を進めた。

また、「イタリア美術」に関する展覧会の開催や関係書籍の出版等も進められたが、こうした動きは同国内だけでなく、イギリスやフランスにも見られるため、両国においても、可能な限り同様の調査・研究を行った。

具体的な研究方法としては、公文書を主とする一次史料の発掘と、同時代文献資料（書籍、新聞、雑誌など）の博捜をその根本に据え、その上で展覧会開催場所と展示作品を実地に調査し、総合的な把握・理解に努めた。

４．研究成果

「イタリア美術」という概念の形成自体は１９世紀後半のイタリア王国という統一国家建国によって始まったものではなく、むしろイタリア半島各地において統一国家が希求され始めた１８世紀、「イタリア半島における美術」の歴史が顧みられ、その歴史的叙述である「イタリア美術史」が編纂されることに伴い「イタリア美術」が意識され、概念が形成されていったと考えられることが明らかになった。統一国家建国へ向かうなかで内政はもとより、対外政策においても「イタリア美術」という概念が積極的に用いられたのである。具体的には、以下の 3 点が指摘できる。

第一にイタリア美術史編纂事業においてイタリア半島内における美術が振り返られ、その過程においてその独自性と世界への発進力が改めて認識されるようになったこと、第二は美術史編纂事業を通してイタリア国内における美術品の保護の充実が訴求され、この観点に基づく公私の美術館制度の整備がなされていったこと、第三は「イタリア美術」というブランド力の国際的な場面における効果が認識され、イタリア王国による美術外交という施策に展開していったことである。さらに第三の点に関し、外交という国家間における交渉はイタリアからの発信のみならず、近隣国における「イタリア美術」という像の確認・受容が、イタリア国内における「イタリア美術」という概念形成に大きく寄与したと考えられる。以上の点に関しては、“Kobu Bijutsu Gakko: Diplomazia dell’arte dal Regno d’Italia al Giappone Meiji”（Atti del XXXVII Convegno di Studi sul Giappone, Roma 2014［印刷中］）において論じた。

イタリア国内で開催された歴史画に関する展覧会情報を収集し、１９世紀美術家の制作によるイタリア半島における歴史画の網羅的な把握に努めた結果、イタリア王国における歴史画というジャンルの中に、過去の、とりわけ、ルネサンス期に活躍し、今日においても世界的に著名な芸術家を主題とした作品が多数あることが突き止めた。こうした芸術家の一人としてレオナルド・ダ・ヴィンチを挙げられる。

2011 年度イタリア学会大会において「イタリア王国におけるレオナルド・ダ・ヴィンチ像(イメージ)」と題した研究発表を行った。本発表では、ミラーノのスカラ座広場に設置されているピエトロ・マーニ作《レオナルド・ダ・ヴィンチ像》の制作から建立までの経緯を、イタリアに所蔵されている未刊行史料により考察し、以下を指摘した。オーストリア支配下の 1857 年、レオナルド像建立が決定され、制作者も選抜されたが、1860 年の同国撤退により同像の制作中止が予想された。しかし、当時ロンバルディア州知事で、後に「イタリアは作られたが、イタリア人を作るのはこれからである」と発言したとされるマッシモ・ダゼリオが制作実現を推奨した。ダゼリオは、レオナルドという人物に、イタリア王国の理想と新興国家の進むべき方向性を見出していたからだと考えられる。

また本像のレオナルドの容姿に関し、それまでに描かれてきた歴史画における複数のレオナルドのイメージが繰り返されている点も重要な意味をもっていることを指摘した。

同像の建立式は 1872 年のミラーノにおける第２回全イタリア美術展開催初日におこなわれ、外国人を含む要人招待客にアンブロジアーナ図書館所蔵の『アトランティコ手稿』の精巧な複製品が配布された。ここにはイタリア王国がレオナルドと共にあることを対外的に示す目的があったと考えられる。イタリア王国という新興国とルネサンス期の芸術家レオナルド・ダ・ヴィンチとの重層的な関係性を指摘した。つまり、「イタリア美術」という概念形成にあたって、ルネサンス期の芸術家たちを称揚することによって、とりわけ西洋世界において主導的な位置を占めるイタリア王国という国家像を示すことが目論まれたということを指摘した。

さらに調査・研究を進めたところ、ルネサンス期芸術家称揚はレオナルドに限らず、ミケランジェロ、ラッファエッロ、ピエロ・デッラ・フランチェスカなどもその対象となっており、イタリア王国建国期に顕著に見られる傾向であることが指摘できる。つまり、彼らの事績を振り返ることが、まさに「イタリア美術」概念の形成に寄与したと言えるのである。本研究に関する膨大な資料を分析中であり、近い将来に論文として纏め、公表を予定している。

ところで、これまでの調査・研究から、「イタリア美術」という概念の形成自体はイタリア王国という統一国家建国以前から唱えられていたことであることが明らかになったが、さらにもう一点指摘することができるだろう。

「イタリア美術」概念形成は、イタリア半島内においてのみ形成されていったものではなく、近隣列強であるフランス、イギリスにおける「イタリア美術」観が大いに影響を与えていたと考えられるという点であり、この点は本研究全体の成果における独創的な指摘である。

フランスにおいては美術アカデミーにおける美の規範としてイタリア・ルネサンス期の作品が教育の中核をなしてきたことは既に知られている。これはラッファエッロ作品の模写が推奨されてきたということに典型的に現れている。これに加えて、イタリア王国建国期の１９世紀のフランスの美術アカデミーにおいては、イタリア・ルネサンス期の芸術家そのものの称揚をテーマとする歴史画が多数描かれた。具体的にはラッファエッロ、レオナルド、ミケランジェロなどである。フランスの美術アカデミーにおけるこう

した動向は、図らずもイタリア王国建国運動を刺激することになったと考えられる。また同時に「イタリア美術」概念の形成に大いに寄与したと考えられる。

一方、イギリスにおいては１８世紀に流行した有力者の師弟を対象としたグランド・ツアーの最終目的地はローマであり、そこで古代の文化遺産を視察することにあった。イタリア半島の歴史的文化遺産が注目されたことも改めて「イタリア美術」概念の形成に寄与したと考えられる。

また、イギリスの美術アカデミーに反旗を翻したラファエル前派のイギリス人画家たちは、ラッファエッロ以前の美術に立ち返ることを唱え、中世へ眼を向けた。中世主義はラファエル前派に限ったことではなく、１９世紀イギリスの大きな潮流であったことは言うまでもない。が、ここでもイタリア半島の歴史が注目されたという事実を看過することはできない。ラファエル前派の中心的な画家の一人であるダンテ・ゲイブリエル・ロセッティは、ダンテ・アリギエーリの文学作品やその伝記的な側面をテーマとした作品を多数描いた。イタリア系のロセッティのみならず、同時代画家に中世イタリアを憧憬する方向性が指摘できる。つまり、中世リヴァイヴァルという文脈においてもイタリアが注目されたわけである。こうした作品が描かれた時代は、まさにイタリア半島では王国統一運動期であり、建国したイタリア王国における「イタリア美術」概念の形成において間接的ではあるが、重要な意味をもったと考えられる。

以上、フランス及びイギリスという列強における「イタリア美術」観と、イタリア王国における「イタリア美術」概念の形成との関係についても論文に纏め、公表を予定している。

フランスやイギリスにおける「イタリア美術」観も大いに取り込みつつ醸成されたと考える「イタリア美術」という概念は、遠く日本にも伝わったと考えられる。直接的にはイタリア人教師の招聘によって設立された工部美術学校においてである。しかし美術ということばも存在せず、その概念理解が徐々に進んでいった日本においては、レオナルド・ダ・ヴィンチに代表される「イタリア美術」の内に科学との結びつきも期待されていたと考えられる。この点については引き続き研究を進めていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１件）

① Mari Kawakami-Shimizu, “Kobu Bijutsu Gakko: Diplomazia dell’arte dal Regno d’Italia al Giappone Meiji”, Atti del XXXVII Convegno di Studi sul Giappone, Roma 2014（印刷中）

〔学会発表〕（計　５件）

① Mari Kawakami-Shimizu, “Kobu Bijutsu Gakko: Diplomazia dell’arte dal Regno d’Italia al Giappone Meiji”, AISTUGIA (伊日研究学会)、 2013 年 9 月 19 日、ローマ日本文化会館

② 河上　眞理「国家間の美術外交と地域社会における美術の展開」明治美術学会、2013 年 10 月 5 日、徳島県立 21 世紀館

③ 河上　眞理「イタリア王国の美術外交と日本」イタリア文化会館大阪・イタリア東方学研究所、2012 年 9 月 21 日、朝日新聞ビルアサコムホール

④ Mari Kawakami-Shimizu,“La competizione tra Italia e lnghilterra per l'insegnamento dell’arichitettura in Giappone alla fine del XIX secolo”, Scuola di Specializzazione in Restauro dei Beni Architettonici e del Paesaggio Universita' di Roma(招待講演)、2012年2月9日、ローマ・ラ・サピエンツァ大学建築学部

⑤ 河上　眞理「イタリア王国におけるレオナルド・ダ・ヴィンチ像（イメージ）」イタリア学会大会、2011 年 10 月 22 日、同志社大学

６．研究組織

(1)研究代表者

河上　眞理（KAWAKAMI, Mari）
京都造形芸術大学・芸術学部・准教授
研究者番号：２０４１１３１６